

二十一世紀に向けて
東北芸術工科大学の誓い

東北芸術工科大学
理事長 徳山 詳直

二十一世紀に向けて

東北芸術工科大学の誓い

一九九二年四月、東北芸術工科大学は、「大学設立の宣言」に掲げる理念のもとに、出発しました。そして、開学から八年が経過しました。

大学の危機が叫ばれる時代に、なぜ東北の地・山形に大学をつくったのか。なぜ東北芸術工科大学―アートとデザイン―でなければならなかったのか。

この問いが、かたときも私の心から離れたことはありません。

人類にとって極めて多難な世紀であった二十世紀が終わり、いよいよ新しい世紀に向かって大学の再出発を期そうとする今、この学園に集う学生諸君に、あらためて、東北の地にこの大学を設立したことの意味を明らかにし、理解を得たいと思います。

大学設立の宣言

この大学は、悠久の大河最上川をつつんで、
蔵王連峰、出羽三山、朝日連峰に囲まれる

日本文化の源流、縄文の奥深い土壌の中から生まれた。

産業革命に始まる近代文明は、二十世紀末の今日に至って、
人類自らを存亡の危機に立たせている。

科学技術と経済理論によって支配された現代社会は、
それ故に、人類史を貫いてきた精神の尊厳、

人間であることの意味を、根底から問われるに至った。

目前に迫った新しい世紀は、戦争と平和、南北問題、

更には体制崩壊の問題を基軸とする新しい世界調和への展望、

そして何よりも、この母なる大地―地球―をいかにして守るか、

これら人類生存条件の解決こそ最大の課題ではなからうか。

この大学は、芸術的創造と、人類の良心によって

科学技術を運用する新しい世界観の確立を目指して、

その課題に応えたい。

わが大学の前に道はなし。

あるは、歴史の実験のみ！。

一九九二年春

設立の宣言で申し上げたとおり、この大学を支える哲学は、現代文明に対する深い反省にあります。

はたして二十世紀とは、いかなる世紀であったのでしょうか。

これまでの人類史を通じて、今日ほど多くの人間が、これほど裕福に生活した時代はありません。その豊かさは、科学技術の発展に支えられて、物質的な面で、これまでのどの時代をも凌駕しています。

しかし、一方でまた、これほど多くの人間が、貧困と飢餓の中におかれた時代もないのです。

アフリカ、ラテンアメリカ、東南アジアの地域で、飢えによって命を失っていく子どもたちは、二千万人にのぼります。

富める者と貧しい者との格差、貧困による悲惨な状況は、いつこうに解決されないばかりか、ますます深刻さの度合いを増しています。

また、二度の世界戦争を経験したにもかかわらず、今なお、民族や宗派の違いによる血で血を洗う紛争と殺戮が、世界中いたるところで繰り返されています。

とりわけ、二十世紀現代文明が生み出した最大の悪魔である核兵器は、廃絶の動きが遅々として進まないばかりか、今なお開発のための実験が続けられています。

さらに、人口の爆発的な増大と科学技術の急速な進展によって、人間は、自らの生存の基盤であるはずの自然環境、社会環境、生態系さえも、破壊するところにまできてしまいました。

私たちの子孫の時代は、果たしてどうなっているのでしょうか。私たちは、せめて今ある地球の自然環境を、次の世代に手渡すことができるのでしょうか。

このような人類はじまって以来の未曾有の危機に対して、世界が一致して立ち上がるために必要な政治的原理や世界秩序は、いまだ見出されてはいません。

—東西冷戦が終焉し、二大大国を中心とする世界体制が崩壊して以降、世界は、今なお、混乱のうちにあります。

こうして、一万年をかけて人類がたどり着いた現代文明の姿を省みると、人間という存在が、いかに愚かで悲しいものかということ、思い知らされます。

今日の科学技術の発展を支える知識のほとんどが、二十世紀後半に入ってから人類が獲得したものだといわれています。

かくも膨大な知識を持ちながらも、一方で、かくも愚かである人間。現代文明の特徴は、この二律背反にあります。

私たちは、この矛盾を検証し、そこから何を導き出すのか。東北芸術工科大学は、そのためにこそ存在しているのです。

人類が直面している危機、すなわち殺戮と貧困と環境破壊の根底には、人間精神の惨状が横たわっています。人間こそが世界の中心であり、万物の頂点にあると考えたときから、歯止めなき欲望の追求による人間精神の荒廃が、はじまったといえます。

私たちが生きているということは、万物と共に生きているということであり、共に生かされて生きているということでもあります。生命や自然に対する畏敬の念に満ちた精神のうちにこそ、新しい文明の原理となるべき創造的な力が秘められています。

哲学や宗教、文学や芸術表現は、まさにそのことを追求しつづけてきたのではなかったでしょうか。人類史を貫いてきた人間精神の尊厳は、芸術や文化によって、かろうじて守られてきたのです。

文化と芸術を知る心を再びとり戻すこと、それ以外に、現代文明の過ちと対決する武器はありません。

学生諸君。

きみたちにお願ひしたいことは、現代文明の姿を、この日本の現状を、きみたちの純粋な目でしっかりと見つめてほしいということです。そして、人間がいかに不可解な存在であるかを、心に刻みつけてほしいのです。

何が美しくてなにがみにくいのか。

なにがほんとうでなにが嘘か。

ひとを愛するとはどういうことか。

いかに生きるべきか。

人間とは何か。
生命とは何か。

これらの問いかけに対する、きみたちの思索と深い悩み、苦しみの中にこそ、人類の未来がかかっているのです。

一九九九年四月、この大学が二十一世紀を切り拓くための中核となる研究機関として、東北文化研究センターを設立しました。その開設にあたって、再び私は次の宣言文を起草しました。

弥生史観の、暗闇の中から、縄文の光が次第に大きく
日本の魂を揺さぶりはじめている。

東北には、一万年を超える長きにわたって、
縄文の精神が脈々と受け継がれてきた。

日本文化の中心といわれる奈良、京都といえども、
その歴史はわずかに千数百年。

縄文の土壌の奥深さにはかなうべくもない。
今日、三内丸山に象徴される数々の発見は、

弥生にはじまる農耕文化が日本文化の原型であるという定説を
完全に覆し、

環太平洋の世界的な広がりの中に、

日本文化の基層を改めて問うべき必要を教えている。

東北の地には、海洋と森林の豊かな実りに支えられて、大自然との共生原理に基づく優れた文明が存在していた。その研究は、日本の文化史を塗り替えるだけでなく、人類の文明史観そのものに転換を迫るに違いない。

この東北こそ、日本に残された最後の自然―母なる大地―である。現代文明の過ちを克服し人間の尊厳を取り戻す戦いの砦である。

東北芸術工科大学は、この豊穡な大地の懐に抱かれて、次代を担う青春と、人類の未来に思いを馳せる多くの良心を結集し、縄文の心を、新たな世界観へと結晶させることを願って設立された。

東北文化研究センターが、その中核として、日本の新たな文明像を発掘し見事に開花させるための、第一級の研究拠点となることを願ってやまない。

東北芸術工科大学が、なぜ東北の地・山形に設立されなければならないのか。その理由は、この文章に尽くされています。

日本には、敵対と破壊による文明とは異なり、人と人との調和、人間と自然との非暴力の関係を原理とする文化が、受け継がれてきまし

た。日本列島を覆う現代文明社会の下には、千数百年の歴史に培われた日本の伝統文化の土壌があり、さらにその基層には、縄文の心が息づいています。この何層にも重なる地層の奥底から、私たちは、未来に生きるための叡智を発掘しなければなりません。

この大学が開学する一年前の一九九一年、京都の地に、京都造形芸術大学が開学しました。以来、このふたつの大学は、志を同じくする姉妹校として歩みをともしてきました。そして、新しい世紀を迎えて、東北芸術工科大学は、「東北ルネサンス」を掲げ、京都造形芸術大学は「京都文芸復興」を旗印に、新しく出発しようとしています。

東北ルネサンス——京都文芸復興。

東北の大地から湧きあがる縄文の響きと、京都から発する文芸復興の鼓動が相呼応し、やがて日本の魂を大きく揺り動かす力となることを確信しています。

二〇〇〇年五月

東北芸術工科大学

理事長 徳山詳直